

て有らざる也」と。是れ天命なるものの存在の信ずるに足らざる一證である。又以爲へらく、「昔は桀の亂だせる所、湯之れを治め、紂の亂だせる所、武王之れを治む、此れ世滌はらず、民改まらず、唯だ上政を變へて、民教を易へたるが故なり、其の湯武に在りては則ち治まり、其の桀紂に在りては則ち亂る、安危治亂は上の政に發する也、則ち豈命有りと謂ふ可けんや」と。是れ天命なる者の存在の信ずるに足らざる二證である。要するに國力の豊富、民資の充實、天下刑政の平定は、一に人力の勉強如何にあるので、天命といふ如きものは少しも之れに與らぬ、といふが取りも直さず墨子の所信である。この點に於いて、彼れはどこまでも自力論者の面目を具へてゐる。一面に天意神命の實在を説き、其の賞罰

の制裁を信じた墨子が、他面に於いて全く有命説を斥けたのは、いさゝか奇異の感もあるが、勤儉力行に重きを置ける彼れの根本主義よりしては、此く説かざるを得なかつたのであらう。彼れが重きを措けるは、學説の首尾齊一てふとよりも、むしろ實際上の目的を達するに都合よく説を立てるといふことにあらざりし乎、而して勤儉力行てふ實際上の目的を達する上よりいへば、有命説よりも非命説の方が都合よかりしにはあらざりし乎。彼れの謂ふ天命の實在、及びその賞罰その事からして、何となく其の兼愛説を一層效力多きものたらしめんが爲めに、言ひ換ふれば、其の政治上、倫理上の要求の爲めにわざと拈出されたやうの趣きがあるではない乎。いづれにもせよ、功利的實利的精神は彼

れの思想を一貫してゐる。彼れはこの精神に反する如何なるものをも排斥し、この精神に資する如何なるものをも攝取したのである。

尙ほ終りに論じておきたいのは、墨子の兼愛と孔子の汎愛との異同である。人或は墨子の兼愛を解して、己れの君父をも他の君父と同様に冷淡に取扱ふ無差別平等の愛となして、之れを孔子の差等愛と區別する。殊に孟子が一たび墨子の兼愛を父なく君なき禽獸の道の如くに言ひ倣せし以來、此の一點を主もなる理由として學者皆墨子を異端視する。さりながら、これは明かに墨子に對する誤解曲解ではあるまいか。墨子は理想としてこそ無差別平等、一視同仁の兼愛を説きたれ、之れを實行する上よりは、矢張り孔

子と同じく、近く親しきより遠く疎きに及ぼす人情發動の自然の順序を踐むべきことを説いてゐる。前にも陳べた兼愛の實踐法の如き、正さしくそれではない乎。其の孝子の親の爲めに度る者、亦人の其の親を惡賊するを欲するか、人の其の親を愛利するを欲するか、説を以て之れを觀れば、即ち人の其の親を愛利するを欲せん、然らば則ち吾れ惡んか先づ事に従ひて此れを得べき、若し我れ先づ事に人の親を愛利するに従うて然る後に人我れに報いて吾が親を愛利せんか、意ふに我れ先づ事に人の親を惡むに従うて然る後に人我れに報いて吾が親を愛利せんか、即ち必ず先づ事に人の親を愛利するに従ひて然る後に人我れに報ずるに吾が親を愛利するを以てせん、(中略)大雅に曰はく、言と

して譬せざるなく、徳として報いざることなし、我れに投ずるに桃を以てせば、之れに報ずるに李を以てせんと、即ち此れ人を愛する者は必ず愛せられて人を惡む者は必ず惡まるゝを言へる也(兼愛下)との説に見れば、墨子はどこまでも吾人が親を愛するに重點を措き、孝子が他人の親を愛するはその仕かへしに吾が親も亦他に愛せられんことを願へばこそなれとまでに言ふ。彼れは斷じて冷淡なる無差別愛の唱道者ではない。「愛に厚薄なし」とは彼れの唱へたる理想なるが、この理想又原理を實現し應用する段取となれば、どうしても我が親に對する愛を本として、之れを擴充して他の親に及ぼさざるを得ぬ、随つて又愛の分布がおのづから近く親しきものに厚くして、遠く疎きものに薄くな

らざるを得ぬ。墨子がこの意味の差等愛を否まなかつた事は上の説によりても分かる。この點に於いては孔墨竟に同一見解に落ち合はうてゐる。唯だ二家の異なる所は、其の愛てふものの内容にある、墨子が其の兼愛を功利一點張りて押し通した所は、どうしても孔子の見と容れない。

概評するに、墨子の倫理説は春秋時代、否支那全思想史を通じて、最も組織あり、論理あり、且つ博大高尚なるものの一つである、一方に於いては、孔子の人道的精神と同一なる博愛觀を立て、他方に於いては、三代聖王の意を紹いで、愛の内容を功利にありとし、而して之れに加ふるに天意の制裁を以てし、かくして一種の神意的功利説を展開したるもの、是れ取りも直さず墨子一家の學相である。愛てふ主觀的動

機の方面と、利てふ客觀的結果の方面とを畧々合はせ攝め得た觀あるなど、思想家として殊に多とするに足る。但だ墨學の弊は、政治家、經世家としての見地から、主もに應世的に説を立てた結果として、餘りに功利てふ物質的方面に重きを措き過ぎ、隨つて高雅なる人格、教養の方面に關する思想を闕如した點にある。彼れの倫理説は、社會の生存、維持、繁榮、豊富といふ如き方面に關する説のみ繁くして、其れ以上の高尚なる目的及び其の實現の方法等に關する思想を闕如して居る。彼れの倫理説は、博大であり、堅實ではあるけれど、趣味に乏しい、品位が足らぬ。これ併しながら彼れが當代の文明の弊に憤を發した反動の餘りに、幼稚なる過去の社會を唯一の理想とした自然の結論と謂はざるを得

ぬ。且つ又墨子は、倫理法の絶對標準を神に歸して、天意即唯一の道德なりとやうに説いてゐるが、而かもその天意てふものは、唯だ彼れが所謂兼愛の道を有效に人に守らせんが爲めに特に賞罰の制裁を人に下だすものとしてののみ便宜上説き加へたやうなものとなりし觀はなかりし乎、敬虔なる宗教的感情は墨子の思想には見はれて居らぬ。その節葬論や、非樂論の如き、時弊に激した反動論として見るべきの價あるも、其の餘りに人情と趣味とを輕視した實利氣質は、淺陋の見と評すべし。

（明治三十九年六月）

回光錄終

明治四十年四月二十五日印刷
明治四十年四月二十五日發行



著者	網島榮一	東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地
發行者	金尾種次郎	東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者	佐久間衡治	東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所	英舍	株式會社

回光錄
金壹圓貳拾錢

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町
金尾文淵堂

發

東京市神田區表神保町

東京堂書店

東京市神田區裏神保町

上田屋書店

東京市日本橋區吳服町

北隆館書店

東京市京橋區尾張町

東海堂書店

東京市京橋區中橋廣小路

前川文榮閣

大阪市東區南渡邊町

杉本書店

久留米市米屋町

菊竹金文堂

名古屋市宮町一丁目

星野文星堂

元

賣

文淵堂圖書要覽

ここに掲ぐるものは發兌圖書の一部に過ぎず別に圖書目錄あり御申越次第進呈す

編纂關係大家六十八名

佛教大辭典

金拾五圓

紙數千七百頁

語數參萬

(內容體裁見本無代進呈)

網鳥梁川著 病間錄

▲目次▲
 宗教的眞理の性質
 基督の詩
 悲哀の高調
 一家言
 爐邊枕頭
 眞理の空名、學究斷斷
 秋の力
 苦痛と解説
 病鶴を痛めて
 答道友書
 信のこゝろを想ふ
 道學論(二節)
 禪思錄
 法喜、眞善美と神、心情
 の宗教、大いなるかな言
 や、新人と自然、功利と
 宗教

方犬録
 悟道の意義、安心立命と
 永生、充實生活と同情
 默想記
 理想信念の自家實現、職
 分に對する自覺、見神の
 眼
 心のたどり
 宗教上の光耀
 (神秘的實驗の一面)
 病間錄
 智、眞理、理性、愛
 眞理と人生
 成功の意義と安心立
 命
 人に答ふる書
 煩悶の人に答ふる書
 心響錄
 悲哀の秘義、心性の要求
 心機縱横、自力信と他力
 信

餘録二題
 絕對神と差別神、超絶神
 と進化神、平等と差別
 偶思錄(ヨブとホーロ、
 希臘的意識と基督教的意
 識)
 人に與へて煩悶の意
 義を説く
 心の一ふし
 法友、恩恵の生活
 讀莊子
 (莊子と解脱哲學)
 驚異と宗教
 予が見神の實驗
 安心立命の二法門
 神火と人火
 應心錄
 (自己の實在、自己と神) 春

病間錄批評集

『病間錄』の批判、好註釋書
 四六版六號活字組全一冊二百頁
 定價一冊金貳拾五錢郵送料金四錢

四版百廿六頁上質紙刷スロク綴新裝
 箱入金壹圓小包拾錢

中村春雨著

舊約物語

新約物語

▼新約三版舊約新版▲

◎宗教雜誌「新人」評(舊約物語)若し世界に最も獨創の見に富める書籍を求めんか何人も先指を基督の四福音書に屈すべし、而も其獨創の見や突如として起り來れるにあらざ、審に其の由を尋ねれば、過來の歴史中に根帯を有す、基督の福音も所詮舊約全書の所産なり、故に基督を了解せんとするにはイスラエル民族の思想、信仰、歴史を了解せざるべからず、著者の自序に曰く「基督なくては舊約全書は唯一篇の神史戯曲を讀む以上の興味を興へないに了ると同時に舊約全書なくしては、基督は何故に生れ、何故にかく云ひ、何故にかく行ひしか、その大信仰、その大自覺、その人間以上の人間、神の人である所以を解するに苦しむ」と所詮新約と舊約とは親と子との關係なり、されば此著、新約物語と相須つて完璧たりといふべし、著者が通俗を旨とし、こちたき理窟を避け美しき神話傳説とな傷けざらんことを務められしと、美麗なる古代の名畫を挿入せられたる用意最も吾人の意を得たり

青木繁畫三色版書八葉及泰西名畫
 美術寫眞版二十四葉挿入クロス綴
 製本堅牢 金壹圓五拾錢 小包送料
 箱入美本 金拾錢
 小林千古畫三色版六葉及泰西名畫
 美術寫眞版二十四葉挿入クロス綴
 製本堅牢 定價金壹圓 小包送料
 箱入美本 金十錢

中村春雨
 村解非
 春昇
 雨說
 畫

畫解 基督物語

石版色刷全紙舶來上等紙刷美本
 一冊定價金十二錢郵送料金二錢

木下尚江著

懺悔

十四年二月五日
定價 三錢
送料 六錢

戀に懺悔死生に懺悔功名心に懺悔たる著者が始めて人生の奥義に觸れて奮然新生活に驀進せんとするに當り既に回憶して赤情を吐露したるもの即ち「懺悔」の一篇となす會て他を攻撃するに及て亦半點の容赦を與へずし彼今更自ら刑罰するに過ぎぬ苦悶の告白なると同時に又實に本に挑まんとする難戰の宣言也偽善なる社會よ一條の荆鞭に汝の頭上に落下し來れるを見よ

中村春雨著

鐮木清方書

一色白浪著 中澤弘光書

宗教小説

無花果

四十年二月第十一版

金送 七錢
料送 十錢

宗教詩集 頌

四六版口繪木版書入

榮

四送 五錢
料送 六錢

安部磯雄著

理想の人の

十四年一月三日
定價 七錢
送料 八錢

著者が筆に口に修養を説くもの茲に二十餘年、今や倫理宗教教育、家庭、社會の五方面より「理想の人」を論じて聊か修養の道に資する所あらんとす、人は理想の政治家「教育家」、文學家、藝術家、實業家たる前に先づ「理想の人」を發する可らず、高尚なる士君子と善良なる市民の眞面目を發揮して偽英雄似而非成功家を排斥し虚偽飾るの貴族的道徳を痛罵して眞摯純朴の平民的道徳を鼓吹す所の著者の言論殊に痛快を極む

木下尚江著

靈か肉か

小説

「良人の自白」「火の柱」の舊衣を脱ぎ「懺悔」に假面を剥いて光明の靈衣を着け以てその眞の人を發揮し來りたる著者が茲に新しく世に問はんとする所のもの即ち「靈か肉か」の一篇とす、往年著者が社會民生の爲に絞つたる悲憤血涙は今や其氣尖を轉じて深刻なる人生の根本的問題に觸れ鋒芒更に當る可らざるものあり、著書中に語りて曰く「都會といふ虚偽の砂漠の片隅に枯木を寄せて組上げた隅の教會で神の生命に觸れたいなどと思ふ人は懶惰な傲慢な貪慾な惡魔の誘惑であらう、若し眞に神の呼吸を嗅ぎたいと思ふ人は懶惰な傲慢な貪慾な惡魔の誘惑であらう、奥へ分け入りたまへ」と。噫これ今日平和を假裝せる基督敎界の一大暗流にして又實に一般青年の煩悶絶叫の大聲に非ずや。この最近にして最要の問題を提示したる本書は今や大に動かんとしつゝある思想界に一大革命を促さずんばやまず、而も著者は破壊の人に非ずして建設の人也。これ著者が所謂社會黨を脱して基督敎社會主義を新唱するの所以、來れ、來つて何人も本書を讀まざる可らず

小説

火の柱

全冊 五十一錢

小説

良人の自白

全冊 四拾六錢

三宅雪嶺主幹
日本及日本人

每月一回(十五日)

口繪(泰西名畫)四六倍判

一、本誌は新聞「日本」が精神的廢滅をなしたる前の特長一切を擧げて雑誌「日本」に合併し、茲に「日本及日本人」と改題したるものにして政治、教育、文藝の各方面に亘り一派の權威たり其清高不羈の主義主張は既に世人の認むる所也
 一、本誌の主幹は三宅雪嶺氏にして卷頭の題言は其自らものす所やがて本誌の氣骨を示し「原生界と副生界」は實に數十號に亘る哲學上の大文字にして其結構と所論と卓絶類を他に見ざるもの又必ず他に時事の問題を論じて愈る事なし
 一、卷初に「東西南北」と題する時事論の獨擅場あり國分青厓氏の「評林」亦常に異彩を放ち藤湖南氏の政治論と角田劍南氏の時文評論とは新にかゝられたる句欄を移
 一、「日本俳句」は新聞「日本」に子規氏が創設したる句欄を移したる最高句府にして碧梧桐氏之選し又同氏が「雪日選」の句欄亦天下の俳士をあつめて紅黄白紫の美を競はしむ
 一、其他毎號花圃女史及び他の諸大家の執筆に係るものもあらず毎に光景を變へ面目を新にして内容多趣一々謂ふに遑あらず

定價 一冊十五錢郵税一錢五厘。半年十二冊一圓八十錢
 一年廿四冊分三圓六十錢。郵券八錢にて見本進呈

發兌元金尾文淵堂 (振替口座) 三七八一(番)

廉價進呈

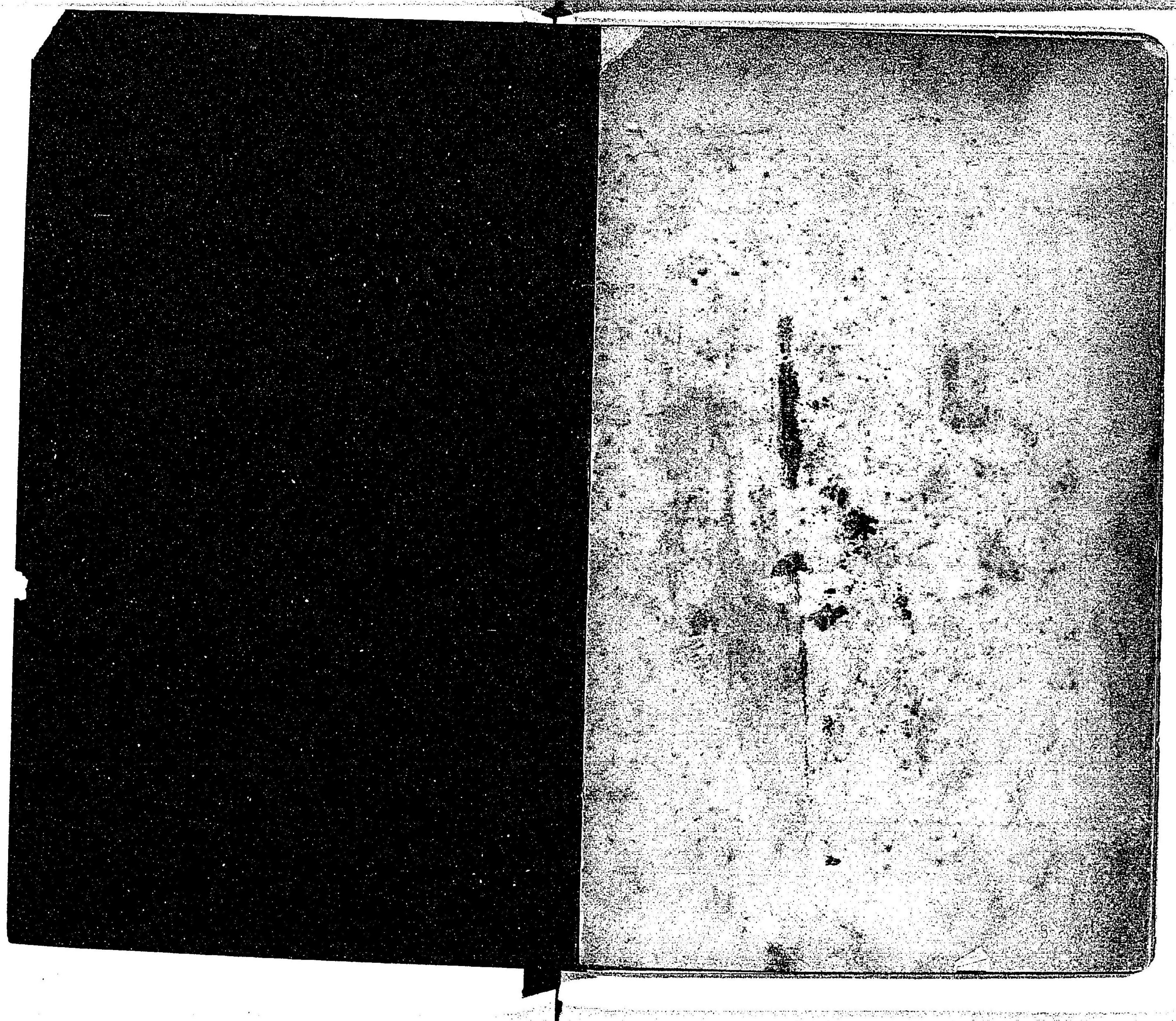
●病間錄批評集

細小活字組四六版壹百八十二頁

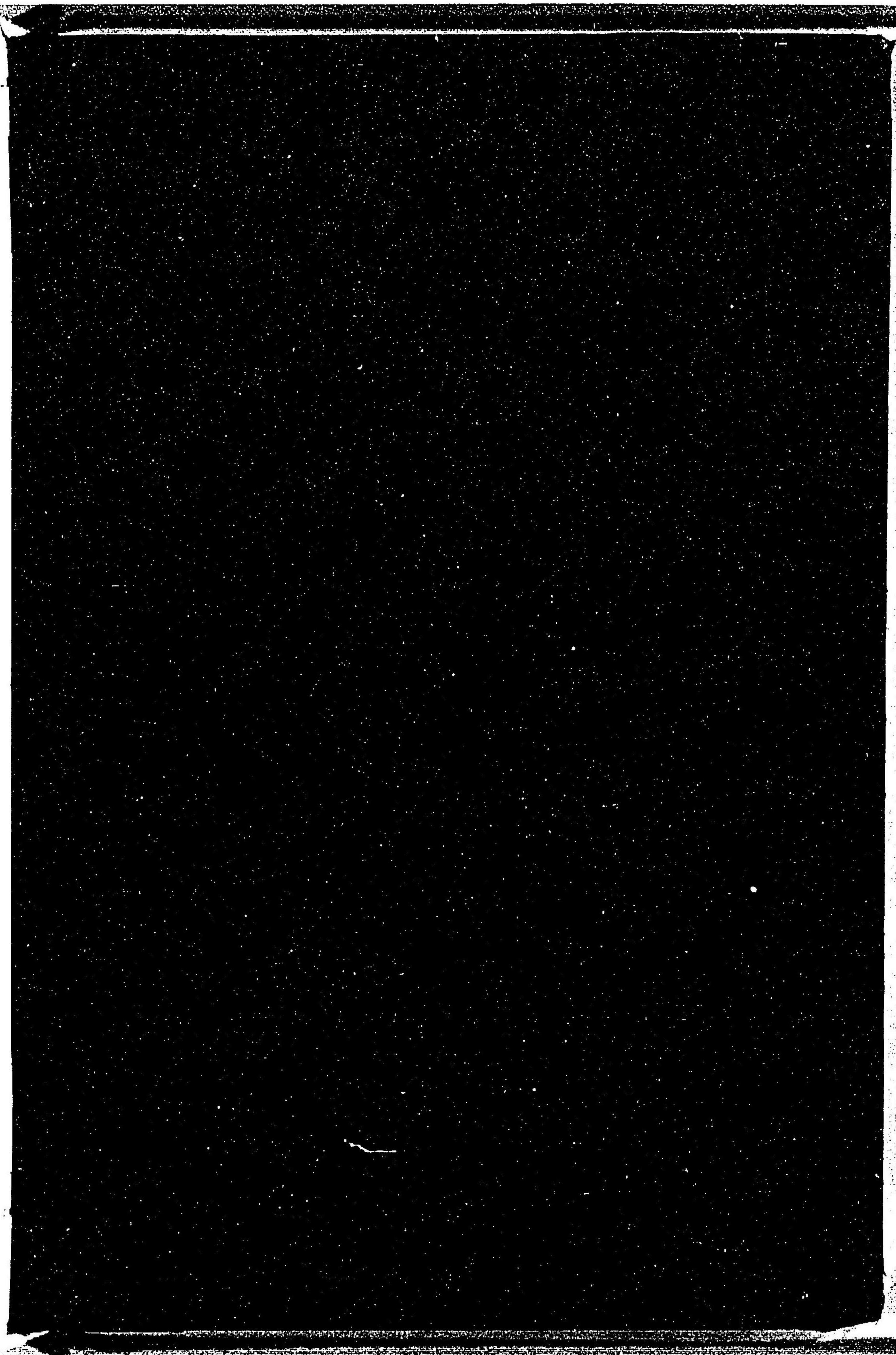
定價 金廿五錢
 送料 四錢

本書は「病間錄」に對する各新聞雜誌の批評を蒐集したるもの天下斯の如き反響を擧げたるもの他にありや。而してこれ豈に病間錄一卷の批判のみならんや、本書は實に時代の聲也、自覺の叫びなり、而して又病間錄の好註釋書也。解剖也。病間錄を體讀せん者の必讀を要すべき書也。

郵券十錢封入御申越の方に進呈す



31
325



013553-000-4

31-325

回光録

綱島 梁川(栄一郎) / 著

M40

ABA-0015



